

【史料紹介】

三河国八名郡岡部藩半原陣屋御用状留（九）

日本史学専攻近世近現代史ゼミ

前回から引き続き、天保十二年（一八四一）の岡部藩半原陣屋から江戸屋敷の元締宛および年寄宛の御用状留を史料紹介していく。

「御元締衆御用状留」の内容をみると、まず幕府との関係は、①公儀触の通知【丑十五・十七番】のみである。

藩江戸屋敷と陣屋との関係では、②前号で紹介した年寄菊池安太夫の咎の関連がつづき、菊池茂手木も半原に蟄居することとなり、その到着報告や居住する屋敷の改修普請・扶持米支給方法について連絡のやりとりが行われている【番外・丑十三・十五番】、③吉田・新城の米相場を江戸屋敷へ報告するようになる【丑十五・十六・十七番】、④寺社領への臨時高役金の納入【丑十五・十七番】、⑤年貢高決定報告【丑十五番】、⑥払米の入札結果報告【丑十五・十七番】、⑦年貢初穂金の納入【丑十五・十七番】、⑧陣屋下役人の死亡報告【丑十五番】、⑨陣屋下役人の再雇用【丑十七番】、

⑩江戸屋敷に関わる畳表や木・板類等の注文・調達【丑十七・十九番】などがある。

藩・陣屋と支配村・領民との関係では、⑪年貢検見【丑十三番】、⑫水損場所の見分および年貢減免方法【丑十三・十七番】、⑬日光祭祀奉行に関わる村内への高役金の臨時賦課【丑十四・十五・十七番】、⑭村役人等の交代【丑十五番】、⑮借入金調達【丑十五・十六・十八・十九番】、⑯藩主在所到着を三河所領村々へ通知【丑十五番】などがある。

「御元締衆御用状留」と「御年寄衆御用状留」を比較すると、先号と同じく基本的には多くの事案が両方ともに書かれている。「御年寄衆御用状留」の方に記載されていないのは③⑧⑩⑪⑭で、⑭は先号と同じである。また②咎を請けた年寄・菊池安太夫や菊池手茂木については、先号と同じく居住する屋敷の普請についての記載はないが、茂手木の扶持米についての記載はある。逆に「御元締衆御用状留」には記載がないが、半原に到着した安太夫に対する対応について詳細な記載が「御年寄衆御用状留」にはある。相手が「元年寄」あるので、元締からの指示が憚られ、年寄から直接行われたのであろうか。

最後に寛政三年とこの天保十二年の二つの御用状留を比較すると、前者の方が陣屋や現地の状況が詳しく報告され、また江戸のことも陣屋へいろいろ報告されている。天保期後半になると、江戸屋敷も現地陣屋も御用状記載がルーティンワークになっている印象をうけた。

本史料は、伊藤愛・大橋拓朗・鈴木貴大・鈴木寛規・鈴木里菜・中谷悠紀・中村知世・福井睦美・山形康太が史料翻刻と説明文執筆のための資料調査・草稿作成を行い、史料翻刻の点検および説明文章稿のとりまとめと最終執筆を神谷智がおこなった。

(天保十二年御元締衆御用状留)

番外

以飛札致啓上候。御自分様弥御堅固被成御勤役、珍重奉存候。當表都而相替儀無御座候。

一、菊池茂手木并母共道中無滞、去ル廿二日當御陣屋へ致着候ニ付、其段拙者共へ申出候間、今便御目付中へ案内申遣し候間、此段得貴意候。御届等之儀ハ御目付中へ可被申伸義与奉存候。

一、右同人江被下御長屋之儀、早速御普請取懸り候所、日々雨天ニ而木品伐出シ候義も抄取不申候。尤取早大体削立等出来候得共、何分雨天ニ而地形致し候事相成不申候。甚以困入申候。夫ゆへいまた建前ニ取懸り候義相成不申候。甚以困入申候。何卒兩三日天氣能致し度奉存候。右ニ付いまた茂左衛門方ニ止宿致し居候義ニ御座候。左様御承知可被下候。

一、今便著伊原伴治其外共帰便ニ付、此段得貴意候。尚追便委細可得貴意候。

右之段為可得貴意、如此ニ御座候。以上。

丑九月廿七日 右兩人印

石川殿

丑拾三番

以飛札致啓上候。先以

殿様益御機嫌能被成御座、恐悦御同意奉存候。當御領中御陣屋向都而相替儀無御座候。

三河国八名郡岡部藩半原陣屋御用状留(九)

一、菊池茂手木<sup>江</sup>被下御長屋勝手方御普請之儀、先便得貴意候通、雨天續<sup>ニ</sup>而抄取不申候。漸々此三四日天氣<sup>ニ</sup>付、組建取早屋根<sup>并</sup>板敷ハ出来候間、壁<sup>者</sup>出来不申候<sup>符</sup>候得共、為引移申候間、左様御承知可被下候。尚委細<sup>者</sup>後便可得貴意候。

一、右同人拾五人扶持之渡方<sup>者</sup>、御割合如何御座候哉。右拾五人扶持之内、正米八三人口<sup>ニ</sup>而御座候哉。當表<sup>ニ</sup>而着之日今日割<sup>ニ</sup>相渡候<sup>而</sup>宜敷御座候哉。九月分丈ケハ御地<sup>ニ</sup>而御渡し<sup>ニ</sup>相成候哉、十月分<sup>分</sup>當方<sup>ニ</sup>而相渡し候<sup>而</sup>よろしく哉。渡方御割合之儀、乍御面倒御仕出書被遣可被下候。

一、八名井・御蘭岡村田方検見<sup>メ</sup>之儀、例年之通願出申候。左様御承知可被下候。近日出郷之積<sup>ニ</sup>御座候間、追便委細可得貴意候。

一、先達<sup>而</sup>得貴意候黒田村田方當夏水損之場所見分願出候間、出郷見分吟味致し候所、申立候通相違無御座候間、堀等<sup>押</sup>ニ相成無據分ハ、年季引被<sup>仰</sup>付候積り、<sup>尤</sup>塩沢村も右同様<sup>ニ</sup>付、<sup>〇</sup>引高減米伺書取調、本紙写共式冊<sup>并</sup>右之外一作引願之分も無據体<sup>ニ</sup>ハ御座候へ共、利解之上、御手當引之積申渡し、則別紙伺書<sup>〇</sup>式冊、右減米仕出帳相添、今便致進達候。御落手委細<sup>者</sup>書面<sup>ニ</sup>而御承知被下、宜敷御取計、御聞濟<sup>ニ</sup>相成候様、可然御取計可被下候。

右之段為可得貴意、如斯御座候。以上。

丑十月七日 右兩人

石川殿

入記

一、黒田・塩沢岡村田方水荒引高減米伺書本紙写共 式冊

一、黒田村田方水損御手當被下米伺書本紙写共 式冊

一、右減米仕出帳面 壹冊

一、御自分様へ拙者共内状 壹封

ノ

丑拾四番

以飛札致啓上候。先以

殿様益御機嫌克被成御座、恐悅御同意奉存候。當御領中御陣屋向都而相替儀無御座候。

一、當丑年 日光御用ニ付、被 仰付候村々高役金之内、半金當六月相納、残半金當十月納之分、別紙差出證文之通、金六拾貳兩壹朱・永廿八文五分五厘<sup>(厘)</sup>取立之、今便道中四日限を以差下申候。着之上御落手宜しく御取計御納可被下候。右差出證文本紙写共致進達候。御落手可被下候。

一、去ル二日付御用状相届、被仰聞候趣逸々致承知候。右貴報可得貴意処、四五日中入札之積ニ御座候間、右取調等其外種々混雜致し居候間、手廻り兼候間、入札相濟次才右貴報取調、委細可得貴意。左様御承知可被下候。今便ハ下シ金差急候間、右一条<sup>而</sup>已得貴意候。御年寄衆江之御受も延引ニ相成候間、宜敷御取繕被仰伸被置可被下候。

右之段為可得貴意、如斯御座候。以上。

丑十月廿日 右兩人

石川殿

入記

一、高役金差出證文本紙写 〔老通  
老冊〕

一、御自分様へ拙者共の内状 老封

ノ

丑拾五番

去ル二日付拾三番御用状到来致拜見候。先以

殿様益御機嫌能被成御座、恐悦御同意奉存候。當御領中御陣屋向都而相替儀無御座候。

一、自是差立候拾壹番・拾貳番御用状相達し、被成御披見候由。貴報被仰聞候趣致承知、事濟候義ハ再貴報文略いたし候。

一、右便得貴意候趣、御年寄衆へ可被仰伸義ハ、夫々被仰伸被下候由。

一、鵜飼罵村百姓乙八へ組頭、江村組頭市左衛門願之通退役并同人悴へ跡役被 仰付候儀、御承知之趣被仰聞候ニ付、夫々申渡し候処、難有仕合奉存候旨御礼申上候義ニ御座候。

一、浅見与兵衛〆御雜用金拾五両御かり入ニ付、同人へ渡證文老通御證印濟、被遣之落手致し候。

一、米切手百三拾五枚押切御調印濟ニ付、被遣之落手致し候。

一、菊池茂手木へ被下拾五人口之儀ハ、御借米無之被下ニ付、右之心得ニ而喰扶持之殘、銀扶持ニ而御定之通六拾目、相場を以毎月相渡可申。尤右之内喰扶持正米渡之儀、願無之候ハ、三人口、願有之候ハ、五人口迄ハ、正米ニ而相

渡し可申。右ニ付正米何人口受取度旨申出候哉、可得貴意旨被仰聞致承知候。

一、當表米相場之儀、以來御用状差立之度々承合、可得貴意旨被仰聞致承知候。

一、去子年東海道筋其外川々御普請ニ付、

御朱印寺社領江懸り候国役金御達書写、御留主居合御落手被成候ニ付、被遣之落手致し候。

一、御追書 日光高役金之儀、取立次米差下し可申旨被仰聞致承知候。

右〇貴報御座候。御入記之通受取申候。

一、前条菊池茂手木へ被下候拾五人口渡方之儀ニ付、被仰聞候趣致承知、右渡方之儀申聞候処、正米五人口受取度旨申之候ニ付、則正米五人口相渡し、殘拾人口八月渡銀扶持ニ而相渡し候積ニ御座候。此段御承知可被下候。

一、前条寺社領へ懸り高役金御書付落手拜見致承知、則例之通取計相觸置候所、相調候ニ付、別紙差出目録之通、金式分式分(朱)・銀式匁式分三り、別紙差出證文之通、今便致進達候。尤金式分(右之内)ハ御自分様迄差立、端銀者御賄中迄差下

し申候間、此段御承知被下、宜敷御取計可被下候。右差出證文本紙写、差出目録共致進達候。御落手可被下候。

一、前条 日光高役金之儀ハ先便差立申候間、取早着金可致義与奉存候。左様御承知可被下候。

一、殿様御儀 御達着之趣、御領中へ相觸候所、御領内村役人・寺社之面々、追々御役所へ罷出申候。此段御承知可被下候。

一、當丑御物成辻取極候ニ付、辻書付忒冊今便差立申候。御落手宜敷御取計可被下候。

一、當丑御拂米入札、時節も宜敷御座候ニ付、例之通取計相觸候処、買人寄方札敷も御座候ニ付、開札致し候所、左之通り。

一、米貳拾貳表（俵）八分六り

一、糯廿表四分五り

一、麦四拾六俵三分

一、大豆廿壹俵八分八り

右之通落札ニ御座候。諸向相場与引合候所、相當ニ付、何れも御拂之積り取計申候。尤糯粳ニ而六百俵買受相願、其餘望人無御座候。麦・大豆・古米・古麦之儀ハ、別紙大積帳之通御拂切ニ相成申候。左様御承知可被下候。

一、右買人落札〇石右前當り仕出書付壹冊致進達候。御落手宜敷御取計可被下候。

一、右之通入札相済候ニ付、例之通納拂大積帳壹冊取調致進達候。御落手御披見可被下候。

一、當丑御物成御初穂金三百疋、例之通致進達候。御落手宜敷御取計可被下候。

一、當表山下方下役安形仙藏義病氣之所、養生不相叶、去ル十日病死致し候段安形忠藏を以届有之候。尤右五六日以前、病氣引込届も御座候所、御用便間ニ付、其段者不得貴意候処、右之通病死致し候間、此段得貴意候。左様御承知可被下候。

一、吉田入札直段（値）、両ニ九斗五升三合七勺四才

一、新城入札直段、両ニ九斗壹升貳合貳勺五才

右之通ニ御座候。此段御承知可被下候。

右之段為可得貴意、如斯御座候。以上。

丑十月廿六日

右兩人



石川殿

入記

- 一、寺社領へ懸り高役金差出目録 壺通
- 一、右同断差出證文本紙写 〔壺通壺冊〕
- 一、右高役金之内式分式朱 壺包
- 一、當丑御物成御初辻書付 壺冊
- 一、落札人名前石當り仕出 （ヨ、ヨ） 壺冊
- 一、當丑納拂大積帳 壺冊
- 一、當丑御物成御初穂金三百疋 壺包
- 一、御自分様へ拙者共の内状 壺封

丑拾六番

以飛札致啓上候。先以

殿様益御機嫌能被成御座、恐悅御同意奉存候。當御領中御陣屋向都而相替儀無御座候。

一、當丑御借戻し金之内三百両、別紙差出證文之通、今便道中四日限を以差立申候。着之上御落手宜敷御取計御納可被下候。右差出證文本紙写共致進達候。御落手可被下候。

一、右下し金之儀、大積帳を以申上候通、當夏者一体納拂差引二而者一、御物成金之ハ盆位之事二而下し金無御座候處、御かり戻し二付、

下し金出来候義二付、當夏下し之分者差出證文ハ不殘御借入金名目二而差出し申候間、此段御承知可被下候。

一、米相場之儀、當時式拾三俵式三分与申事御座候。入札後少々下落致し候得共、跡御拂米之儀下し金も差急候間、

追々御拂ニ取計申候。尚追々可得貴意候。前条之通今便三百両差下シ、跡下し者何れ来ル廿日後ニ相成可申候。此段

御含二得貴意置候。左様御承知可被下候。

一、跡合  
右下し金一条而已為可得貴意、如斯御座候。以上。

丑十一月七日 橋本  
山本

石川殿

入記

一、下し金差出證文本紙写

壹冊

一、浅見与兵衛渡三百両替證文本紙写

壹冊

一、右金引當切手三拾六通

一、鵜飼寫村新平渡五拾両書替正文本紙写

壹冊

前へ

一、浅見与兵衛御かり戻し金三百両書替證文本紙写并引當切手三拾六通并鵜飼寫村新平御かり戻し金五拾両書替

證文本紙写共取調、為御證印今便差立申候。御落手宜しく御取計、御證印濟被遣可被下候。

丑拾七番

去ル九日付拾四番御用状到来致拜見候。先以

殿様益御機嫌能被成御座、恐悅御同意奉存候。當御領中御陣屋向都而相替儀無御座候。

一、自是差立候番外并拾三番・拾四番・拾五番御用状三度之御用状追々相届、被成御披見候由。貴報被仰聞候趣致承知、事濟候義者再貴報文略致し候。

一、右三度之御用状ニ得貴意候趣、御年寄衆へ可被仰伸義者、夫々被仰伸被下候由。

一、黒田村水損御手當引被下米伺書并右同村・塩沢村水荒減米伺書共式冊致進達候義ニ付、得貴意候趣御承知被下、御年寄衆御聞濟之御證印御取、被遣之致落手候。

一、日光御用ニ付、村々高役金六拾弍両壹朱・永廿八文五分五り差下し、右差出證文目録共致進達候義ニ付、得貴意候趣御承知被下候由。右者無相違着相納候ニ付、差出證文壹通御年寄衆御受取之御證印御取、被遣之被下致落手候。

一、寺社領へ懸り候高役金弍分弍式朱・銀弍匁弍分三り差下し、右差出證文并目録共致進達候義ニ付、得貴意候趣御承知被下候由。右者無滞着相納候ニ付、右差出證文壹通御年寄衆御受取之御證印、被遣之致落手候。御取

一、御物成御初穂金三百疋差立候処、無相違着、御落手例之通御取計被下候由。

一、安形彦兵衛再御抱、伺書御伺被下、御聞濟之御附札濟、被遣之被下落手致し候。

一、公儀左之通

一、酒造増石之儀御觸書写<sup>②</sup>

壹冊

一、古金銀引替之儀同断<sup>③</sup>

壹冊

一、飲食類其外品々華美御制シ之儀同断<sup>(4)</sup> 壹冊

一、御囲増初之儀ニ付同断<sup>(5)</sup> 壹冊

一、在々<sup>ニ</sup>而芝居見世物等御制シ之儀ニ付同断<sup>(6)</sup> 壹冊

右五冊御年寄衆被成御渡候ニ付、被遣之候間、落手可致旨被仰聞、則到来落手致し候。

一、御作事方<sup>御</sup>別紙之通<sup>注</sup>量表其外住文有之候間、例之通廻し方取計可申候。木品之儀ハ御差急<sup>ニ</sup>も無之候得共、量表<sup>者</sup>品々御買上ケ相廻し可申旨被仰聞致承知候。

右<sup>者</sup>去ル九日付拾四番御用状貴報ニ御座候。御入記之通受取申候。

一、前条黒田村水損御手當被下米伺、御聞濟之御下知御證印御取、被遣候間、<sup>近日</sup>則村方呼出し申渡し、受證文申付、追便差出し可申候。左様御承知可被下候。

一、前条安形彦兵衛再御抱<sup>入</sup>御聞濟ニ付、則御下知之趣を以、於御役所申渡し候所、冥加至極難有仕合奉存候旨申之、別段御礼<sup>五冊</sup>申出候義ニ御座候。此段得貴意候。

一、前条御觸書之内、御囲初<sup>五冊</sup>一条者先便別便を以委細得貴意候間致文略候。右之外四冊之儀<sup>者</sup>例之通り取計申候。

一、前条量表<sup>并</sup>板類御注文書之趣致承知、量表之儀ハ其筋へ申付置候間、相納次才早々津出し可致候。板類之儀是又其筋へ懸合候得共、此節<sup>至</sup>而拂底ニ付、何れ近日有無相分候積<sup>ニ</sup>付、追便委細可得貴意候。左様御承知可被下候。

一、當表御拂米之儀も追々御拂<sup>ニ</sup>取計相濟申候。此段御承知可被下候。買受人名前石當り等之儀<sup>者</sup>追<sup>而</sup>取調可得貴意候。

一、今便御借戻し金之内三百両、別紙差出證文之通、今便道中四日限を以差立申候。着之上御落手宜敷御取計可被下

候。右差出證文本紙写共致進達候。御落手可被下候。

一、當表米相場、當時廿三俵位<sub>与</sub>申事<sub>二</sub>御座候。左様御承知可被下候。右之段為可得貴意、如斯御座候。以上。

丑十一月廿六日

橋本  
山本

石川殿

入記

一、下し金差出證文本紙写

老通  
老冊

一、御自分様へ拙者共の内状

丑拾八番

以飛札致啓上候。先以

殿様益御機嫌能被成御座、恐悅御同意奉存候。當御領中御陣屋向都<sub>而</sub>相替儀無御座候。

一、當丑借戻し金之内式百両、別紙差出證文之通、今便道中四日限を以差下申候。着之上御落手宜敷御取計可被下候。右差出證文本紙写共致進達候。御落手可被下候。

右一条<sub>而已</sub>為可得貴意、如斯御座候。以上。

丑十二月四日

橋本  
山本

石川殿

入記

一、下し金差出證文本紙写

壹通  
壹冊

丑拾九番

以飛札致啓上候。先以

殿様益御機嫌能——例文

一、當丑御借戻し金之内七拾九両三分、内正金七拾両壹分并廿九両三分ハ鈴木仙之助へ御返濟金、廿両二九両三分者、利金、山本茂左衛門受取書壹通二而為替下之積、別紙差出證文之通、今便道中四日限を以差下申候。着之上御落手宜敷御取計可被下候。右差出證文本紙写共致進達候。

一、先達而御懸合御座候置表御買上ケ津出し致し候所、年内便船無之候間、當年出帆不致旨申越し候間、精々懸合候得共、何分右之仕合二御座候間、此段御承知可被下候。且又板茂御買上ケ二者致し候へ共、右之次才二而致方無之候間、来早春津出し致し可申候。左様御承知可被下候。

右下し金一条差急候間、一条(マ)而為可得貴意、如此御座候。以上。

丑十二月廿日

兩人

石川殿

入記

一、下し金差出證文本紙写 壹冊

(天保十二年御年寄衆御用状留)

一筆致啓上仕候。

殿様御儀御在所江之御暇被為蒙

仰候段承知仕、恐悅至極奉存候。右之段為可申上、捧愚札候。恐惶謹言。

九月

長谷川  
兩人

右御同人様

去ル六日之尊書<sup>川支二画</sup>拜見仕候。<sup>一昨日十三日到來</sup>然<sup>者</sup>從是進達仕候去々月廿二日付書状相届、御披見被成下、為尊答被仰下候趣承知仕候。事<sup>相</sup>濟

候義<sup>者</sup>再御受不申上候。

一、下宇利村百姓乙作宗門帳外申渡受證文壹通、御元ノ衆ノ被差出、尊覽被成下候由被仰下承知仕候。

一、菊池安太夫・同茂手木共御咎被仰付候ニ付、御別紙写被遣之候間、御書面<sup>ニ</sup>而承知可仕。尤去ル七日御表出立ニ付、着之上可然取計可申旨被仰下承知仕候。

一、御咎被 仰付候安太夫之儀ニ付、不被仰下候共承知之事<sup>ニ</sup>可有御座候思召候得共、御用筋何<sup>ニ</sup>而も相談事等無用之儀<sup>与</sup>相心得可申旨被仰下承知仕候。

一、無據用向之外、右同人宅へ猥り<sup>ニ</sup>罷越し申間敷、村方之もの共者尚更立入不申候様取計可申。併折々下役等心附候様<sup>ニ</sup>申付置<sup>可</sup>旨被仰下承知仕候。

一、菊池茂手木御給人席計<sup>ニ</sup>而、當御役所之勤向者被 仰付無之候義<sup>ニ</sup>付、其心得<sup>ニ</sup>而罷在可申旨被仰下承知仕候。

一、右茂手木拾五人扶持被下候。其外何も別段被下方無御座候事<sup>ニ</sup>付、若取計方相分り兼候ハ、御表へ伺可申旨被仰下承知仕候。

一、右外御用向者御元<sup>之</sup>ノ衆<sup>之</sup>可申參候間、可得其意旨被仰下承知仕候。

一、前条安太夫事、上下共道中無滞一昨十三日當御陣屋へ着仕候。此段申上候。

一、右<sup>ニ</sup>付前条心得方等之儀被仰下候趣、逸々承知奉畏候。  
御書付写式通落手拜見并

一、右之外今便御用向之儀ハ御元<sup>ノ</sup>衆迄申伸候間、可被申伸条御承知可被成下候。  
右之段為可申上、如斯御座候。以上。

九月廿七日 右兩人

朝 只之進様

一、窺御機嫌、呈書例之文言。

十月廿日

橋本又兵衛  
山本茂左衛門  
判

朝 只之進様



以別紙申上候。然者當丑年

日光御用ニ付、當御領分村々江被 仰付候高役金、當六月半金相納、殘半方當十月納之分、別紙差出證文之通、金

六拾貳両壹朱・永廿八文五分五り取立之、今便道中四日限を以差立申候。着之上御受取可被成下候。右差出證文之

儀ハ御元メ衆迄差出申候。

一、右之外御用向之儀ハ御元メ衆迄申伸候間、可被申伸条御承知可被成下候。

右之段為可申上、如斯御座候。以上。

十月廿日 右兩人

右御同人様

一、窺御機嫌、呈書例之文言。

十月廿六日 橋本又兵衛

山本茂左衛門  
判

朝 只之進様

去ル二日之尊書到来拜見仕候。然者從是去々月晦日・去月十五日付を以進達仕候書狀相届、御披見被成下、為尊答被仰下候趣承知仕候。尊答ニ而事相濟候義者再御受不申上候。

一、殿様御儀、去月十八日益御機嫌能御表被成御發駕、同十九日御道中無御滯被成 御在着、恐悅之御事ニ御座候。此段為心得被仰下候旨承知仕候。

一、右之外御用向之儀ハ御元ノ衆ノ可申参候間、可得其意旨被仰下承知仕、則御同人ノ申参候条承知仕候。

一、當表御雜用御借入金拾両浅見与兵衛渡證文卷通御證印被成下、御元ノ衆ノ到来落手仕候。

一、東海道筋其外川々御普請ニ付、寺社領へ懸り候高役金被

仰出御書付写、御元ノ衆ノ到来落手仕、則例之通取計、相觸置候処、相納候ニ付、則別紙差出目録之通、金式分式朱・銀式分式分三り、別紙差出證文之通、今便御元ノ衆迄差下申候間、御同人ノ可被相納条、御承知可被成下候。右差出證文目録共、是又御元ノ衆迄差出し申候。

一、當丑御物成辻取極候ニ付、辻書付卷冊今便御元ノ衆迄差出申候。

一、當丑御拂米入札、時節茂宜敷御座候ニ付、例之通取計相觸申候所、買入寄方札数も御座候ニ付、開札仕候処、左之通り。

一、米式拾式表八分六厘

一、糯廿表四分五り

一、麦四拾六俵三分

一、大豆廿壹俵八分八り

右之通落札ニ御座候。諸向相場引合候所、相當ニ付、御拂之積りニ取計申候。尚委細之儀ハ御元ノ衆迄申申候間、御同人ノ可被申伸条御承知可被成下候。

一、右落札人名前石當り仕出書付卷冊并當丑納拂大積帳卷冊取調、御元ノ衆迄差出申候間、御同人ノ御承知可被成下候。

一、吉田入札直段、両ニ九斗五升三合七勺四才

一、新城入札直段、両ニ九斗壹升貳合貳勺五才

右之通ニ御座候。此段申上候。

一、前条

殿様御在着之趣、御領中へ相觸候所、為恐悅御領内村役人・御用働・御金用勤・其外寺社之面々、追々御役所へ罷出申候。此段申上候。

一、當丑御物成御初穂金三百疋、例之通御元ノ衆迄差出申候。左様思召可被成下候。

一、右之外今便御用向之儀者御元ノ衆迄申伸候間、可被申伸条御承知可被成下候。

右之段為可申上、如此ニ御座候。以上。

十月廿六日 右兩人

朝 只之進様

一筆致啓上候。

殿様御儀御道中益御機嫌能、去月十九日被遊御在着候段承知仕、恐悅至極奉存候。右之段為可申上、捧愚札候。恐一。

十月廿六日  
長谷川  
橋本  
山本

朝 只之進様

一、窺御機嫌、呈書例之文言。

十一月七日  
橋本  
山本  
判

朝 只之進様

以別紙申上候。然者當丑御借入金之内三百両、別紙差出證文之通り、今便道中四日限を以差立申候。着之上御請取可被成下候。右差出證文之儀ハ御元ノ衆迄差出申候。

一、右之外今便御用向之儀者御元ノ衆迄申伸候間、可被申伸条御承知可被成下候。右之段為可申上、如斯ニ御座候。以上。

十一月七日 兩人

右御同人様

一、窺○御機嫌、呈書例之文言。寒中

十一月廿六日

橋本又兵衛  
山本茂左衛門  
判

朝 只之進様

一筆啓上仕候。寒甚之節御座候得共、御手前様弥御勇健被成御勤仕、珍重御儀奉存候。寒中御安否承知仕度、以愚札如斯御座候。恐——。

十一月廿六日

右両人  
判

右御同人様  
参人々御中

一筆致啓上候。甚寒之節御座候得共、各様弥御堅固被成御勤役、珍重奉存候。寒中御見廻為可得貴意、如斯御座候。恐——。

十一月廿六日

右両人  
判

福寫周治様  
 吉野六郎左衛門様  
 石川清兵衛様  
 中村貢様  
 豊泉善左衛門様  
 參人々御中

去ル九日之尊書相届拝見仕候。然者従是去月七日・同廿日・同廿六日付を以進達仕候書状相達、御披見被成下、為尊答被仰下候趣奉得其意候。尊答<sup>三</sup>而事相濟候義者再御受不申上候。

一、右便黒田・塩沢両村田方水荒<sup>ニ</sup>付引高減米伺書<sup>一</sup>老冊<sup>并</sup>黒田村田方水損御手當被下米伺書<sup>一</sup>老冊<sup>ノ</sup>式冊、御元<sup>ノ</sup>衆<sup>ノ</sup>被差出、御聞濟之御證印被成下、御元<sup>ノ</sup>衆<sup>ノ</sup>到来、落手仕候。

一、従

公儀御觸書写、左之通。

一、諸国酒造之儀<sup>ニ</sup>付御觸書写 老冊

一、古金銀引替之儀<sup>ニ</sup>付同断 老冊

一、品々華美之儀御制之儀<sup>ニ</sup>付同断 老冊

一、諸国困初之儀、是迄困来之外、當丑<sup>ノ</sup>来ル已迄五ヶ年之間、困増之儀<sup>ニ</sup>付同断 老冊

一、在方<sup>二</sup>而芝居見世物等御制之儀<sup>三</sup>付同断

卷册

ノ五册御元ノ衆<sup>江</sup>被成御渡候間、落手仕候ハ、例之通取計可申旨被仰下承知仕候。

一、右之外御用向之儀ハ御元ノ衆<sup>ハ</sup>可申參候間、可得其意旨被仰下、則申參候条承知仕候。

一、前条御觸書五册御元ノ衆<sup>ハ</sup>到来落手仕、則例之通り取計申候。

一、安形彦兵衛再御抱<sup>入</sup>ノ伺書之趣、御聞濟之御附札被成下、御元ノ衆<sup>ハ</sup>到来落手仕、則同人呼出し、御下知之趣を以

申渡し候所、○難有仕合奉存候旨申之、別段御札申上候義<sup>ニ</sup>御座候。此段申上候。

<sup>下札</sup>

「安形彦兵衛再抱入之件」

一、當丑御借戻し金之内三百両、別紙差出證文之通、今便道中日限を以差立申候。着之上御落手可被成下候。右差出

證文之儀<sup>者</sup>御元ノ衆<sup>迄</sup>差出し申候。

一、當表御拂米之儀追々御拂<sup>ニ</sup>取計、此程迄<sup>三</sup>不殘相濟申候。買受人名前石當り等之儀ハ取調、追々差立可申。左様

思召可被成下候。

一、右之外今便御用向之儀<sup>者</sup>御元ノ衆<sup>迄</sup>申伸候間、可被申伸条御承知可被成下候。

右之段為可申上、如斯御座候。以上。

十一月廿六日

橋本  
山本

朝 只之進殿<sup>サマ</sup>

一、窺御機嫌、呈書例之文言。

十二月

橋本又兵衛  
山本茂左衛門  
判

朝 只之進様

以別紙申上候。然者當丑御借戻し金之内貳百兩、別昏差出證文之通、今便道中四日限を以差立申候。着之上御落手可被成下候。右差出證文之儀ハ御元々衆迄差出し申候。

右一条而已為可申上、如斯ニ御座候。以上。

十二月四日

右兩人

右御同人様

一、窺御機嫌、呈書例之文言。

十二月廿日

兩人  
判

朝 只之進様

以別紙申上候。然者當丑御借戻し金之内七拾九兩三分、別紙差出證文之通、今便道中四日限を以差下申候。着之上

百兩



御落手可被成下候。右差出證文之儀ハ本紙写共御元ノ衆迄差出申候。

右之段為可申上、如此御座候。以上。

十二月廿日 兩人

右御同人様

(天保十二年 完)

註

- (1) 石井良助・服藤弘司編『幕末御触書集成 第五卷』(岩波書店、一九九四年)、史料番号四五〇〇。
- (2) 『同』、史料番号四三八五。
- (3) 『同 第四卷』(岩波書店、一九九三年)、史料番号四一〇四。
- (4) 『同』、史料番号四〇二六。
- (5) 註(1) 前掲書、史料番号四四四八。
- (6) 『同』、史料番号四七四四。